



Title	既存のジェンダーレスデザインの批評と検討
Author(s)	宮川, 駿介
Citation	デザイン理論. 2024, 83, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93438
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

既存のジェンダーレスデザインの批評と検討

宮川 駿介 京都工芸繊維大学大学院在学

ジェンダーレスとデザイン

近年、ジェンダーフリーやジェンダーレスといった言葉はよく耳にするものになっている。

そして、所謂“ジェンダーレスデザイン”と称する製品を目にする機会も多くなった。このような試みは、あらゆるものが女性／男性向けに分かれているような状況の中で、ジェンダーフリーに寄与するデザインとして評価したい一方、次のような問題についても考えねばならない。即ち、“ジェンダーレスデザイン”として世に出るデザインが持つ特徴が、ジェンダーレスについての理解に影響するという問題だ。

もし仮に“ジェンダーレスデザイン”として社会実装されたものが、実際にはジェンダーレスとは呼べないようなものであった場合には、それはジェンダーレスについての誤解を広めることになりうる。時にジェンダーレスは従来のジェンダー規範になじめない者にとって重要な概念になる。それが誤った理解をされてしまうことは深刻な問題であり、ジェンダーフリーに寄与するどころか、逆の作用をしてしまいかねない。従って、“ジェンダーレスデザイン”が本当にジェンダーレスと呼べるものなのか、ということが慎重に問われなければならない。

“ジェンダーレスデザイン”の分析

本発表では、このような問題意識の元、既存の“ジェンダーレスデザイン”についての分析・考察を行った。そして、有効なジェンダーレスデザイン実践の方針を示すことを試みた。

実際に分析対象とする“ジェンダーレスデザイン”は、日経デザイン 2021 年 5 月号に掲載された「特集 ジェンダーレスデザイン」から以下の 8 事例を取り上げた。

- ①アンド・コスメの男性向け化粧品「BOTCHAN」パッケージ
- ②ミキモトのアクセサリ「MIKIMOTO COMME des GARÇONS」
- ③FABRIC TOKYOのメンズパターンオーダースーツ
- ④米マテルの着せ替え人形「Creatable World」
- ⑤アクタスのランドセル「SCHOOL BAG」
- ⑥-1 トンボの制服「ジェンダーレス制服」(ブルゾン)
- ⑥-2 トンボの制服「ジェンダーレス制服」(スラックス)
- ⑦「SALONIA」の美容家電のジェンダーレスカラー展開

それぞれについて、a ジェンダー表象に関わる特徴的なデザイン要素、b 該当する製品ジャンルの訴求対象のジェンダー、c 分析対象の訴求対象のジェンダー、d ジェンダーレスとされる理由、について分析し、4 つの類型を見出した。そしてそれらの類型に対して考察を行った。

なお、本発表では西條(2019)の議論を参考に、ある対象のジェンダーを特定する時に、その根拠とされる性質をジェンダーマーカーとよび、このジェンダーマーカーとして働く要素が少ない状態をジェンダーレスな状態であると定義して議論を進めた。

4つの類型

本発表で設定した類型は、以下の4つだ。類型1が「ジェンダー交差的コンセプト型」で、①アンドコスメ「BOTCHAN」⑤アクタス「SCHOOL BAG」がこれに当たる。デザインのコンセプトにジェンダーレスの観点とは交差した次元のものが見られるのが特徴だ。類型2が「ジェンダー消去型」で、④米マテル「Creatable World」⑥-1トンボ「ジェンダーレス制服」(ブルゾン)が該当し、元々の製品ジャンルが訴求/表象するジェンダーを消去しているものだ。類型3が「訴求対象移行型」で、③ FABRIC TOKYO「FABRIC TOKYO think Inclusive Fashion」⑥-2トンボ「ジェンダーレス制服」(女生用スラックス)が該当する。特徴は元々のデザインを大きく変更せず、訴求対象のジェンダーを移行する点だ。類型4が、「ジェンダー追加型」で、②ミキモト「MIKIMOTO COMME des GARÇONS」⑦「SALONIA」がこれに含まれる。元々の製品ジャンルが訴求/表象するジェンダーと逆のジェンダーに対応するジェンダーマーカーを追加しているのが特徴の類型だ。

考察

そしてこれらの類型について考察を行い、各類型の評価を行った。類型1は、ジェンダーマーカーになりうるようなジェンダー規範的性質をデザイン要素として用いながらも、それを別のコンセプトの表象として機能させることで、それらの性質とジェンダー規範とのつながりを揺さぶることができていた。様々なデザインへの応用や手法の洗練ができれば、ジェンダーフリーに貢献するジェンダーレスなデザインの方法論への発展が期待できる。類型2は、ジェンダーマーカーを排除する事でジェンダーレスな状態を作れることを可能にしていたが、人体における身体的な性差などがない状態をジェンダーレスとして理解させる恐れがあるなど、類型1に比べて懸念点が見られた。類型3は、特に女性服の規範性を脱する点において、

ジェンダーフリーに貢献するものといえた。しかし、一見中立な男性ジェンダーを選ぶことをジェンダーレスと思わせるような危険性もあり、“ジェンダーレスデザイン”と呼ぶことには問題があると考えられる。最後の類型4は、訴求したいジェンダーに対応するジェンダーマーカーを追加してしまっており、従来のジェンダー規範を再生産してしまう可能性が高く、ジェンダーフリーへの貢献を考える上で、最も懸念が大きい類型であった。

結論

これらの考察結果を踏まえて、有効なジェンダーレスデザイン実践の方針として、第一に「ジェンダー交差的コンセプト型」、第二に「ジェンダー消去型」を提案した。これら2つは、ジェンダーレスな状態を体現し、さらにジェンダーフリーに貢献する部分も大きいといえる。後者ではジェンダーレス概念の理解に少し不安な点が見られたが、前者では、本発表で扱った範囲においてはこの点に関しても問題は見当たらなかった。

従って、これらの手法をデザインの方法論としてより体系化、そして洗練させていくことが、ジェンダーレスデザインの実践を通してジェンダーフリーに寄与するために重要な課題だと結論付ける。そのためには今後、考察結果の客観性を担保するような追加調査や、それぞれの方針が得意/不得意とするデザイン分野の調査、それぞれの方針に則った新たなデザイン実践、などを行う必要があるだろう。

参考

- 1 西條玲奈「人工物がジェンダーをもつとはどのようなことなのか」『立命館大学人文科学研究紀要』120巻(2019) p.199~p.216